

# 校長室から ひがしなら通心

(R元年度) 茨木市立東奈良小学校 川上 隆 No. 10  
令和元年5月20日(月)発行

大阪NIE通信より 第44号(2019.3.30)  
昨年度の5年生(現6年生)が取組んだ本校の紹介記事が載りました。  
今年度もNIEに取り組めます。みなさんも新聞を見るようにしましょう。

**新聞が身近にある環境を!**  
毎日新聞社の三角氏に聞く

毎日新聞社(大阪本社)エリア報道センター編集委員の三角真理さんに、お話をうかがいました。

Q. NIE担当として、どのようなことをされているのですか?  
A. 昨年4月からNIE担当をしています。現在は、毎週土曜日の「ぐるっと兵庫 大阪 京都」の紙面を担当しています。子どもに関する話題を取り上げたり、学校紹介として特色ある学科を紹介したりしています。「わたしの世界」のコーナーで

Q. 取材されて感じられたことは?  
A. 取材する中で、多くの子どもと接しますが、読書が好きだという子どもと話していると語彙力の豊かさ、音楽や美術などに頑張る子どもからは、表現力の豊かさを感じることもあります。それらの子どもに共通して言えることは、自分の思いを言葉にし、質問にきちんと答えられる子どもが多いということです。

Q. 取材された中で、多くの子どもと接しますが、読書が好きだという子どもと話していると語彙力の豊かさ、音楽や美術などに頑張る子どもからは、表現力の豊かさを感じることもあります。それらの子どもに共通して言えることは、自分の思いを言葉にし、質問にきちんと答えられる子どもが多いということです。

一方、新聞や本を読んでいる学生が少ないことには、危機感を覚えます。学生だけでなく、新聞を購読していない、読んでいない先生がたくさんおられます。残念に思っています。

Q. 最後に先生やNIEに関するアドバイスをお願いします。  
A. 新聞を読む習慣のない先生方には、新聞を手を取り、ご自身の好きな分野や興味ある記事だけでも良いので読んでもらいたい。また、関心を持った記事を子どもに紹介したり、授業で活用し

地帯の子どもたちの様子を話して欲しいという依頼でした。イラクで取材をしていた記者が現地で見ただけで感じたことを子どもたちに話しました。新聞社には、様々な分野を専門とする記者がいます。小学校から大学まで、それぞれの依頼に応じた記者を学校現場とつなぐのも大切な仕事です。

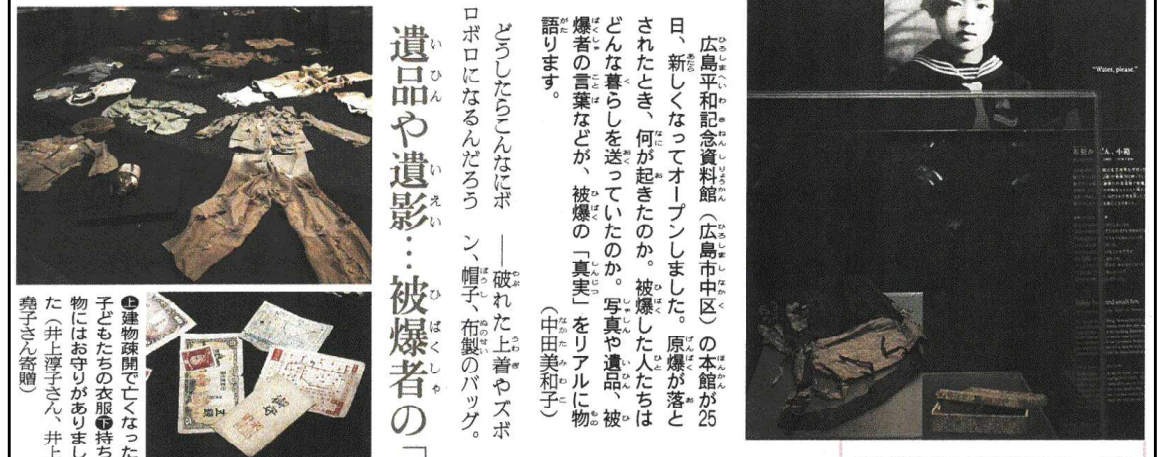
Q. 「わたしの世界」のコーナーでは、様々な分野で活躍している子どもを取材されていますね?  
A. 吟剣詩舞部で活躍する高校生やオセロ小学生グループ2018で7位

# 朝日小学生新聞より 平成31年4月28日(日)

6年生は、22日(水)~23日(木)に修学旅行で広島に行きます。平和学習で22日に訪ねる広島平和記念資料館の記事を見つけました。

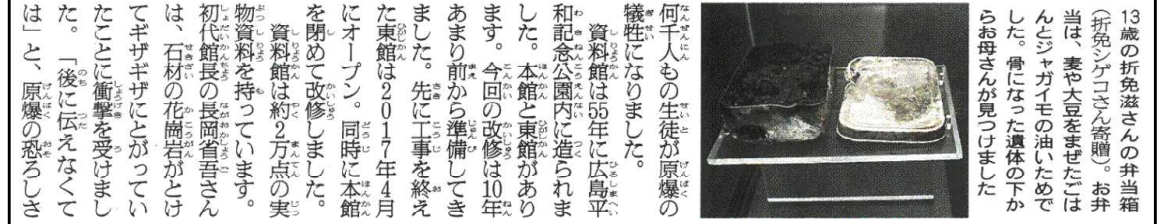
## 被爆の「真実」を見せたい

広島平和記念資料館(広島市中区)の本館が25日、新しくなってオープンしました。原爆が落とされたとき、何が起きたのか。被爆した人たちはどんな暮らしを送っていたのか。写真や遺品、被爆者の言葉などが、被爆の「真実」をリアルに物語ります。(中田美和子)



【原爆(原爆)】核兵器の一つ。日本がアメリカ(米国)などと戦った太平洋戦争末期の1945年、米軍は8月6日広島に、9日長崎に原爆を落としました。熱線、爆風、放射線が一瞬で人々の命をうばい、街を焼きつくしました。広島では45年末までに約14万人が亡くなったとされています。

1945年8月6日、建物疎開の作業をしていた12~14歳の子どもたちの遺品です。建物疎開は、空襲のとき火が燃え広がらないように、密集地の建物をこわすことです。作業にかり出されていた



大田節子さんは12歳でした。「お水ちょうだい」。ねだられたお母さんは水を探しに行きます。もどったときには息を引き取っていました。お母さんは「ごめんね、ごめんね」と口をぬらしてあげました。当日持っていた布製のかばんと小箱(川向榮子さん寄贈)です。これも広島市の広島平和記念資料館

血のにじんだものもあり。無傷のままに残ったお守りは何を守ったのでしょうか。

13歳の折免滋さんの弁当箱(折免シゲコさん寄贈)。お弁当は、妻や大豆をまぜたほんとジャガイモの油いためでした。骨になった遺体の下からお母さんが見つけました

を「示す資料を集め、設立につなかりました。今回の改修は「実物」にこだわりました。被爆者の平均年齢が80歳をこえ、じかに証言を聞くことが難しくなっています。遺品や資料はますます重要になっています。「後から作ったものだからって実際にあったものは疑いようがない」と副館長の加藤秀一さん。

展示は一つのゾーンがあります。「8月6日のヒロシマ」は、そこで何が起きたかを示します。高熱や爆風で変形したものや、技術の進化でよりはっきり見えるようになった写真、市民がえがいた絵などが並びます。「被爆者」は、一人ひとりの苦しみや悲しみ、叫びに向き合うゾーンです。遺品や遺品(ごま)は、亡くなった人やその家族の言葉が添えられています。後遺症に苦しめられた人の記録からは、原爆の被害がいかに長く続いたかがわかります。